

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第六主日C 年

小西広志

2022 年 2 月 15 日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は 2022 年 2 月 13 日、年間第六主日となっています。主日のミサの三つの朗読をシノドス的な教会の立場から読んで味わっていきましょう。

人間に信頼し、その心が主を離れ去っている人

第一朗読は『エレミヤ書』から採られていますが、5 節の「人間に信頼する人」と 7 節の「主に信頼する人」の対比が見られます。

5 節の「人間に信頼し、その心が主を離れ去っている人」に注目してください。東京教区の雨宮神父様の解説を読むと興味深いことに気づかされます。ここでの「人間」と「人」はそれぞれヘブライ語の単語が異なるのだそうです。ヘブライ語には人を表す表現がいくつかあるようで、5 節での「人間」はアードームだそうです。これは土から生まれて土へと帰っていく者としての人間の存在を表すそうです。しかし、同じ 5 節の「その心が主を離れ去っている人」の「人」はゲヴェルというそうです。これは力ある者としての人間存在を意味するそうです。そうしますと、「人間に信頼し、その心が主を離れ去っている人」とは「土から出て土に帰るしかないはかない存在である人間に信頼し、あるいは、神さまの力を拒否しておのれのままだに生きる人間にたよってしまい、心が神さまから離れ去っているにもかかわらず、自分自身は力ある存在だと思いこんでいる」という意味になるでしょう。「呪われよ」はヘブライ語でアールだそうですが、次第に呪術的な意味合いはなくなり、「無意味な生き方をしている人を見たときの語り手の思い」を表すようになっていったそうです。ですから、「呪われよ」より「呪われる」と訳した方が適切かもしれません。ですから、5 節は人間に信頼して、自分の力をたよりに生きている人は呪われる、すなわち、そんな人生は無意味であるという厳しい一節なのです。

滅んで

第二朗読では 18 節にある「キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです。」から、「滅ぶ」について理解を深めたいです。ギリシア語はアポリリュミです。他動詞では「滅ぼす、失う」の意味があり、自動詞では「滅びる、消滅する」の意味となります。新約聖書では文字通り、「殺す、滅ぼす」の意味で使

われています。さらに意味が深まって、自然のいのちの終わり、つまり肉体の死を越えて、神さまの救いを完全に失うことも指すようになりました。「永遠の死」を意味するようになったのです。

ザアカイの回心の物語の最後にイエスさまは「人の子が来たのは、失われたものを捜して救うためである」（ルカ 19 章 10 節）と言われました。ここでもアポッリュミが使われています。失われた人とは、神さまからの救いを失っている人のことです。言い換えると神さまからの救いを必要としている人のことです。

ちなみに、脳卒中のことを医療関係者はアポるといいます。英語の apoplexy に由来することばですが、ギリシア語のアポッリュミと関係するのかもしれませんが。

幸い

福音朗読ではイエスさまの説教のことば「幸い」（20 節）について理解を深めてみたいです。今日の朗読箇所では四つの幸が続きますが、ギリシア語の原文は「幸いだ」が最初にきます。この点が日本語とは構文が違います。イエスさまのメッセージの最初のことばは「幸いだ」となります。「幸せだ」と理解してもよいでしょうし、「祝福されている」と理解してもよいでしょう。

まとめ

第一朗読で示された神に信頼する人を、福音朗読ではイエスさまは「貧しい人」と呼んでいます。貧しい人とは神に頼って生きていく人のことなのだと思います。そして、なによりもイエスさまご自身が貧しい人でした。十字架にいたるまでイエスさまは天の御父に頼って生きたからです。その貧しいイエスさまが、今日もミサの中で、祭壇の上でさらに貧しくホスチアの形までになってくださいます。貧しいわたしたちをイエスさまは御自分の貧しさで豊かにしてくださるためです。

教会とは貧しい人々のためにあります。こうして「貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいる」（ヨハ 12 章 8 節）というイエスさまのことばは、教会の中に実現していくのです。教会は、もともと貧しい人と共にあるのです。それが、教会が神さまからいただいている特徴となるのです。この点については、いつか詳しくお話する機会が巡ってくるでしょうから、これ以上は申し上げません。ただ、教会は貧しい人の教会なのだという事実を心に留めてください。

「貧しい人々は幸いである。神の国はあなた方のものである」は理解が難しい福音の一節です。しかし、これこそがイエスさまのメッセージの中心点となります。確かに理解するのは難しいですが、真（まこと）の幸いを生きている方々、貧しさを生きている方々、そして神さまと共に神の国を生き始めている方々に出会わせていただけるのは、わたしたちが教会に属しているからです。

教会の社会的な活動、とりわけ貧しく生きる方々への取り組みを批判なさる信者さんがいらっしゃるの大変残念なことです。教会は人生の勝利者のために存在するのではないのです。イエスさまが悲しむ人、苦しむ人、貧しい人の友であったように、教会もまた貧しい方々の友であるのです。そして、貧しさの姿は現代社会では大きく変わりつつあります。たくさんの方々が、それぞれの貧しさの中で一生懸命生きているという事実気づくためには、静かな祈りの時、つまり、黙想が必要です。貧しさと観想し祈る教会とは互いに結びつきあうのです。

それでは、また来週。